フロイライン・エンゲルハルト
― トーマス・マン『魔の山』における女性像と「同性愛」―

伊藤　白

1．はじめに

本論は、トーマス・マンの作品における女性像を扱い、その描写からマンの世界観の一端を探る一連の試みの第4弾である。[1] ここでは、表題のとおり『魔の山』(1924) に登場する極めて目立たない一人の女性、女教師エンゲルハルト嬢を扱うことになる。その際、今回マンの女性像を読み解く上での鍵に据えるのは、近年マン研究を賑わしているマンの「同性愛」の問題である。

1975 年の日記公開を契機に、単なる文学上の嗜好ではなく、現実のセクシュアリティの問題として浮上したマンの同性愛的傾向は、Böhm や Härle、Maar ら[2] の研究を経て、今では広く一般に認識されているといってよい。特に 90 年代以降の研究は、マンの同性愛を全面的に否定する発言の減少につれて、マンの同性愛的傾向を前提とすることで作品に何を読み取ることが出来るかという、より生産的な議論へシフトしている。また日本においても、2004 年以降の短い期間に田村和彦、福元圭太、奥田敏広と 3 冊の研究書が続けて出版されるなど、[3] この問題にとりわけ高い関心が集まっている。

しかし、これほど盛んな議論が行われているにもかかわらず、マンのセクシュアリティの問題

トーマス・マンの作品からの引用は次の全集による (巻号 / ページ)。Mann, Thomas: *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden.* Frankfurt am Main 1990.

[1] これまでの議論については以下の拙論を参照。「ゼゼミ・ヴァイヒブロート　『ブデンブローク家の人々』における女性像とキリスト教」：京都大学大学院独文研究室『研究報告』17 号 (2003)、13~26 頁：「白いドレスのロッテ　トーマス・マン『ワイマールのロッテ』における女性像」：同 18 号 (2004)、91~105 頁；「ショーシャ夫人は美しいか　トーマス・マン『魔の山』における女性像と〈東〉」：同 19 号 (2005)、115~133 頁。

[2] Böhm, Karl Werner: *Zwischen Selbstzucht und Verlangen. Thomas Mann und das Stigma Homosexualität.* Würzburg 1991; Härle, Gerhard: *Die Gestalt des Schönen. Unersuchung zur Homosexualitätsthematik in Thomas Manns Roman „Der Zauberberg".* Königstein / Ts 1986; Maar, Michael: *Geister und Kunst.* Frankfurt am Main 1997.〔邦訳：ミハエル・マール『精霊と芸術　アンデルセンとトーマス・マン』(津山拓也 訳) 法政大学出版局 2000 年。〕

[3] 田村和彦『魔法の山に登る　トーマス・マンと身体』関西学院大学出版会 2002 年；福元圭太『「青年の国」ドイツとトーマス・マン　20 世紀初頭のドイツにおける男性同盟と同性愛』九州大学出版会 2005 年；奥田敏広『トーマス・マンとクラウス・マン〈倒錯〉の文学とナチズム』ナカニシヤ出版 2005 年。

には、やはりまだ判然としない部分があるように思う。それは、いったいトーマス・マンにとって、女性とは、すなわちマン作品における文学上・創作上の女性およびマンを取り巻く現実の女性（この二つは分けて考える必要がある）とは、いったいどのような位置を占めるのだろうか、という疑問だ。つまり、この女性を排除した理想的・英雄的な男性社会や、「合一を予定しない」プラトニックな愛情としての同性愛などという世界が、現実にはカーチャ・マンと結婚し6人の子供の父親となったトーマス・マンの実生活や、さらにはそのマンによって描き出された長編・短編の男女織り交ざる世界の描写と、どのように調和もしくは均衡を保っていたのか、という点がこれまでの研究からはすっぽりと抜け落ちてしまっているのだ。もちろん、マンの「同性愛」を論じている研究に女性が不在だからといって、それはその議論の目的そのものに悖るというわけではないだろう。しかし同性愛の問題の陰に隠れがちな女性像の問題とそこから読み取れるマンの世界観の検証を行うことは、マンの性愛とそこから見えるマンの世界、マンが身体をもって見、呼吸し、触り、感じ取った世界を考える上で、より全体的なトーマス・マン像を与えてくれるように思う。

トーマス・マンにとって、女性とは、文学上・創作上の女性および現実の女性とは何か。今回はまず、その前者のみを問題とし、後者については稿を改めて扱うこととするが、ここで着目する目立たない女教師は、マンの同性愛的傾向との深い関連の中で論じられるショーシャ夫人との比較によって、マンの同性愛というものを探り、そしてそこからまた逆にマンの女性像というものを明らかにするための、一つのヒントを与えてくれる。すなわち後述するように、ドイツ・ワンダーフォーゲルの理論的指導者ハンス・ブリューアーの影響を受けたとされるマンの「同性愛」のあり方は、マンの女性像のあり方と密接な関係にあると考えられるのだ。

2．エンゲルハルト嬢

まず、エンゲルハルト嬢とは誰かという点から始めよう。彼女は、サナトリウムの食卓でカストルプの右隣に座る、「顔に産毛の生えた、弱々しく頬を熱らせた、黒服の見栄えのしない女」（III 65）として登場し、すぐ後に官立高等女学校の教師と判明する。「正確な言葉を話す」（III 105）高い教養の持ち主であり、それに相応して市民的、つまり実に平凡なしかし堅実な倫理観を持つ、自己抑制能力の高い人物といえるだろう。しかし「自分自身のことには何の要求も希望も持っていない」（III 191）と紹介される一方で、彼女がそう自分に言い聞かせているに過ぎないことは、医師クロコフスキーの「愛」についての講演をききながら「貪婪な目を輝かせ、産毛のある両頬を赤く染めて」（III 177）いたことからも疑う余地がない。彼女は、恋に恋をするオールド・ミスとして、『ブデンブローク家の人々』（1901）のゼゼミ・ヴァイヒブロートや後の『ワイマールのロッテ』（1939）におけるシャルロッテ・ケストナーと同じ系列にある一つの典型であるとい

うことができ、その意味においてもこれまでの拙論の流れにおいて極めて重要な存在である。

その彼女は物語の中でどのように描かれているだろうか。彼女の物語の上での第一次的な意義は、カストルプの恋の相談役である。前拙論でも引用したが[4]「食卓での談話」の節において、ドアを「ガシャン」と閉めるショーシャ夫人を見てハンス・カストルプが過剰反応する意味を鋭く見抜くと、この老嬢は「第三者からショーシャ夫人が魅力的であることを保証してもらいたい」(Ⅲ 192) 彼の片思いに加担し、「まるで子猫がミルクに忍び寄っていくよう」とショーシャ夫人を褒めちぎる。さらに彼はこの老嬢との会話の中から、ショーシャ夫人のファーストネームや、彼女の夫との関係など、ショーシャ夫人にまつわる情報を聞き出すことになる。彼女は、カストルプだけにではなく読者にもショーシャ夫人の事情を明らかにする仲介者の役目を負っているとともに、カストルプの恋の病を助長する役割を果たしている。

しかし、ゼゼミ・ヴァイヒブロートの後裔として、ショーシャ夫人との比較という観点からエンゲルハルト嬢を観察するなら、彼女はショーシャ夫人にはない大きな特性が与えられていることに気がつく。前拙論でも議論を試みたとおり、[5] ショーシャ夫人があれほど一個の人物としてつかみどころがなく描かれていたのに対し、エンゲルハルト嬢は明らかな性格上の一貫性を持って描かれるばかりか、細かく複雑な心理描写によってショーシャ夫人など足元にも及ばないほど深くその人間像が掘り下げられているのだ。

彼女は、「子猫のような」とショーシャ夫人をほめながら、ハンス・カストルプの間できわめて複雑な、超絶技巧的な心理戦を繰り広げる。つまり、ショーシャ夫人に惚れているのは本当はハンス・カストルプであり、それを２人して承知していながら、ショーシャ夫人に熱を上げているのはむしろエンゲルハルト嬢のほうだという設定のもとで、芝居のまねごとをする。

> 「おはようございます」とハンス・カストルプは言った。「よくお休みになれましたか。きっとあなたの美しいミンカの夢でもご覧になったのでしょうね。・・・おやおや、あなたはあの人の話をするとすぐ顔を赤くなさる。まったくすっかりやられていらっしゃるのですな。いや、否定なさる必要はありませんよ。」(Ⅲ 195)

これに本当に顔を赤くしたエンゲルハルト嬢は次のように答える。

> 「あら、いやですわ、カストルプさん。私を狼狽させようとなさって、そんな当てこす

---

[4] 伊藤 (2005)、117 頁以下。
[5] 同上、122 頁以下。

りをおっしゃったりして、いけない方だわ。そんなことをなさると、私たちがあの人に目をつけていて、そのことであなたが私の顔を赤くさせておしまいになることが、ここのみんなにわかってしまうじゃありませんか。」(同上)

このようなばかばかしいお芝居に２人が精を出すのには、それぞれにそれぞれの理由がある。「ハンス・カストルプのほうは、ショーシャ夫人について誰かと話をしたいばかりに、ショーシャ夫人をだしに使って女教師をからかって、この老嬢とのこういう悪ふざけに、不健康で倒錯的な慰めを見出していた」からであり、一方「見栄えがせず」、「自分自身に対する男性の関心などということには何の要求も希望も持っていない」エンゲルハルト嬢は「青年にからかわれたり赤面させられたりするのがなんとなく楽しかったから」である。こういう互いの事情を、互いが互いに見抜いており、しかもハンス・カストルプはそれを「複雑で不潔なこと」と感じ、嫌悪感を覚えていたにもかかわらず、この込み入った演技を続けるのだ。

この細部にわたって心理的に裏付けられた描写、ショーシャ夫人を引き立てる役に甘んじながら、くっきりとした輪郭と一貫性のある豊かな心理描写を与えられ、一個の人間像としては影が薄くつかみどころのないショーシャ夫人に、むしろ逆に引き立てられているかのような女教師エンゲルハルト嬢。彼女は、いったい何なのだろうか。

その問いに答える前提として、当時の「女教師」の置かれた位相を考えてみたい。周知のとおり、イギリスに遅れてドイツでも始まった産業革命は、ドイツの社会構造に大きな変革をもたらした。[6] 急激な都市化が始まり、従来「家」で行われてきた生産活動が都市の工場へと移ったこと、また家庭で生産されてきた消費財が工業化にともなう商品経済の進展とともに商店で入手できるものとなり、家庭が消費の場となったことで、生産と消費が分離する。このことは女性の生き方を大きく変える。

中・下層階級の家庭の未婚女性は、生産の行われなくなった家庭にもはや長く留まらず、工業化が新たに創出した職場に、工場労働者、看護婦、市民家庭の女中などとして働きにでる。そこには幼くして労働を始め、未婚の時代はもちろん、結婚して子供を育てながらなお労働を続けなければならないほどの貧困という性急な理由があった。それに対し、中産階級以上の市民女性の場合には、少し状況が異なる。

---

[6] 近代ドイツ社会史・女性史については既に多くの研究がなされているため、詳細はそれらに譲る。筆者が特に参照した研究書は以下のとおり。若尾祐司『近代ドイツの結婚と家族』名古屋大学出版会 1996年；ウーテ・フレーフェルト『ドイツ女性の社会史 ― 200年の歩み』(若尾祐司ら 訳) 晃洋書房 1990年；川越修／姫岡とし子／原田一美／若原憲和 (編著)『近代を生きる女たち 一九世紀ドイツ社会史を読む』未来社 1990年。

『ブデンブローク家の人々』に表れるドイツ社会史を論じるときにもしばしば指摘されるように、トーニ・ブデンブロークの時代すなわち19世紀後半には、家事のほとんどを女中にまかせ社交や芸術などにいそしむいわば貴族的な生活を送ることが、市民女性たちにとってのステータスとなっていた。当然のことながら収入を得るための労働は、彼女たちにとってタブーであった。しかし、その一方で多くの市民階級の家庭の経済状態は必ずしも優雅なものとは言えず、むしろ多くの場合そのような生活を送っているがごとく対面を取り繕わざるをえなかったという。そのような家庭の娘たちが自活の道を探さなければならないときには、労働者階級とは一線を画し、自らの身分にふさわしい職業を選ぶ必要があった。そんな女性たちに好んで選ばれた職業の一つが、「教師」という道だったのだ。教師という職業は当時女性に解放された唯一の知的職業であり、19世紀末の統計では看護婦・助産婦についで多い市民的職業となっている。[7]

そのような「女性教師」の生活はどのようなものだったのだろうか。ここでは、この職業を特徴づけるものとして次の二点を挙げておきたい。一つ目は、既に述べたようにそのような「女性教師」のほとんどが市民家庭の出であり、「女中雇用による家事労働の負担解除を条件としていた」、つまり、外では学校で教えるという知的労働に従事し、その一方で家事労働は女中に任せる生活をしていたということである。この職業は「女性自身の間での階級支配」という基盤の上にのみ成立しうるのであり、「必然的にこの基盤の温存へと方向付けられる」。[8] すなわち、女性教師という知的職業は女性の自立・解放という精神的な進歩主義を標榜しつつ、一方で極めて保守的な性質を内包するという矛盾を抱えていたといえる。

第二の点は、女性教師の「独身制」という制度、すなわち彼女たちは結婚と同時に職を失うということが前提とされていた、ということであり、逆に言うと教師として働いている女性は多くが未婚であったということである。[9] 19世紀の後半に起こった急激な女性教員の増加（統計によれば全教員に占める女性教員の割合が2.2パーセント（1822年）から21.1パーセント（1921年）へと約10倍に増加したという数字が残っている）、さらには当初低学年の教育のみに従事していた女性教師が高等女学校での地位を求めるようになると、男性教員とのあいだに軋轢が生まれ、さまざまな議論を呼ぶようになる。その一つの対策ともなった[10] のが女性教員の「独身制」

---

[7] 若尾、326頁。

[8] 同上、332頁。

[9] 当時の女性教員をめぐる研究については、以下を参照した。田村雲供「ドイツ女子中等教育の展開過程と女子教師の位相　19世紀初頭より1908年まで」：『史学雑誌』1989年7月、1219~1246頁；黒田多美子「ドイツ第二帝政期における女性教員の社会的立場」：『独協大学ドイツ学研究』1988年10月、25~52頁；黒田多美子「女性の教育と社会進出 ― 中産階級の娘たちの教育界への進出」：『ドイツ女性の歩み』三修社2001年、272~290頁。

[10] 後述のとおり、この制度は男性教師・女性教師間の軋轢を解決するために生まれたものではなく、たとえば

という制度である。この制度はその法制化の成否によらず、カトリックの地域を中心に一般的な制度であった。この制度には反論も少なからず存在したものの、もともと女子教育が修道女によってなされていたことによる女性教員のイメージや、そもそも結婚できず経済的に自立する必要のある女子の経済的救済でもあったこの職が既婚女性に与えられる必要はない、とする見方、さらには、女性は二人の主人に仕えることはできない、という宗教的・伝統的な考え方から、女性自身によっても支持されていたという。

このような社会的背景は、エンゲルハルト嬢の特質を的確に説明する。当時の「独身女性教師」は、一般に中流階級以上の家庭の出身であり、教師として社会進出を果たしながらも、制度に忠実な保守的な女性であった。また「結婚によって退職」出来なかった女性であり、「見栄えが」せず、「自分自身に対する男性の関心などということには何の要求も希望も持っていない」にもかかわらず「愛」についての講演をききながら「貪婪な目を輝かせ、産毛のある両頬を高潮させて」いるような存在、恋に恋をするだけで、具体的個別的な「他者」に向けられた愛からは疎外された存在であるとイメージされていたのである。このような「女性教師」の像に、実はトーマス・マンは自身の葛藤と同類のものを見出していた。そしてここで結論を先取りすることが赦されるならば、そこに描かれていたのは、トーマス・マン自身の同性愛と女性観という二つの問題の接点なのである。

3．マンの女性観

マンの女性観と同性愛観の間には相互関係が存在することを確認するためには、マンにとって女性とは何か、という問題から考える必要があるだろう。ここではしばらく小説から離れ、より直接的な態度をうかがい知ることの出来るエッセイにおいて、マンの女性観と言うものを見てみたい。

まず目に付くのは、前節で見てきたような思い入れたっぷりの女性像からはとても想像のつかない、女性嫌悪の発言である。しかも、それは戦争によって『魔の山』執筆を中断して書かれたエッセイ『戦時の思想』(1914) や『フリードリヒと大同盟』(1915)、または『非政治的人間の考察』(1918) に、すなわち上に見てきたようなエンゲルハルト嬢を描いた直後に書かれたエッセイの中に主に現れる、という意味でも興味深い。

『フリードリヒと大同盟』は、シュレジエンをめぐる「七年戦争」を舞台に、「大王」フリー

バイエルン州では1821年に既に法制化されているなど、女性教員に対する伝統的イメージが寄与していたものと思われる。しかし、たとえばベルリンでは19世紀後半、女教師の結婚による退職率は60パーセントを超えており、この制度が廃止されることは、男性職員の就職に深刻な影響を与えるものであると考えられていた。黒田 (1988)、42頁。

ドリヒが中立を宣言していたザクセンに侵入し、「侵略戦争」との汚名を負ったその歴史を振り返ることで、第一次世界大戦におけるドイツのベルギー侵入を正当化する、という意図の下に書かれる。しかし、このエッセイにおいて独特なのは、ドイツ対オーストリア・ロシア・フランスの大同盟という対立が、フリードリヒ対オーストリアのマリア・テレジア、ロシアのエカチェリーナおよびフランスのポンパドゥール夫人という図式、すなわち男対女という図式に置き換えられている点である。そしてフリードリヒ大王は女性を激しく厭う。

彼は異性を憎んだ、嘲った。異性がそばにいることに我慢ならなかった。(X 91)

長い戦争の間、相手が女なのだ、という考えは一瞬たりとも彼の念頭を去らなかった。この考えは、当時の彼の数え切れぬほどの発言の中に現れる。なんと言っても、男たるもの女三人ごときに負けては失礼千万という気持ちが、再三彼の気持ちに喝を入れたのではなかっただろうか。(X 95)

もちろんこのような発言は、フリードリヒのものとして書かれている以上、マン自身のアンチ・フェミニスト振りを明示するものとはいえない。むしろ問題となるのは、地の文におけるマン自身の解説である。

彼女(マリア・テレジア)は女の執念の限りをこめてフリードリヒを憎悪している。(X 81)

禁欲的な仕事の人であり軍人であったフリードリヒに対して、贅沢好きで女性的なお気に入りの宰相(ザクセン・ポーランドのブリュール伯)が抱く憎悪、それは生得のものであり、決して消えることのないものであった。(X 98)

このように、否定的な形容詞に「女性的な」、「女らしい」という形容詞を並べる手法は、「女性」という表象に否定的なイメージがあることを前提としている。しかも、フランスをルイ 15 世によってではなく、女性ポンパドゥール夫人に代表させる行為は、マンにとってのこの女性対男性という図式が必要不可欠なものであったことを示している。

しかし、このような発言だけを拾ってマンの女性観と呼ぶのは短絡的といわざるを得ない。マンの女性観はもう少し複雑に屈折しているのだ。1903 年に書かれた『永遠にして女性的なるもの』というエッセイを見てみよう。

十分だ。私が言いたかったのはこうだ。私たち惨めな平民そしてチャンダーラ、ルネサンス男の嘲笑のもと女性的文化と文化の理想を崇拝する私たち、芸術家として痛みを、結果を、深みを、そして苦悩の愛の存在を信じ、美しい表面的なことには少しばかりイローニッシュに対峙する私たち。そのような私たちにとっては、芸術家としての女性からもっともすばらしいもの、そしてもっとも興味深いものが期待されるということ、それどころか、いつか、女性が人々を導く存在、巨匠に到達することができるということは、かなり確かなことなのだ。（・・・）厳しく冷たい異教徒が「美」と呼ぶものとは、何も関係がないのだ。『ファウスト』の最後の言葉、そして『神々の黄昏』の終わりごろにバイオリンが歌うもの、それは一つであり、真実なのだ。「永遠にして女性的なるものが、私たちを導く。」[11]

言うまでもなく、ここで「ルネサンス男」と言われているのは当時イタリア文化に心酔し、文学のあり方をめぐってトーマス・マンと対立していたその兄、ハインリヒ・マンである。[12] 一方、「ルネサンス男」に嘲笑される「私たち」は、「女性文化」を崇拝する。「永遠にして女性的なるものが、私たちを導く」というゲーテ『ファウスト』最後の有名なフレーズを用いて女性を礼賛しながら、マンが自分を女性の側に重ね、あるべき自分の芸術の姿を女性的なものに託していたことは、Detering の言うとおり、明らかであろう。[13] しかもこの女性礼賛の姿を借りた自己アピールには一種の自虐的要素が付きまとう。「女性文化」を崇拝する「私たち」は、「惨めな平民」でありインドのカーストにおいて最下級の身分に位置づけられる「チャンダーラ」なのである。

しかし、ここに現れている「女性性」は、次のことを考えるとき、さらに複雑なものとなる。すなわち、ここで扱われている「女性性」が時として「同性愛」を意味しているのだ。Detering の解説にもあるように、このエッセイで紹介されているトーニ・シュヴァーベの『エスター・フランツェニウスの結婚』は、そのタイトルから想像されるものとは異なり、多くの同性愛的愛情を描いている。おそらくマン自身もこのエッセイの中で「女性性」を称揚したいのか「同性愛」を称揚したいのか、混乱しているとすら思われるが、いずれにせよしかし最後の『ファウスト』

---

[11] Mann: Das Ewig-Weibliche. In: Ders.: *Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Werke, Briefe, Tagebücher. Bd.14.1. Essays I, 1893-1914.* Frankfurt am Main 2002, S.54-59, hier S.59. (13 巻本の全集には不掲載)

[12] この時期のトーマスとハインリヒの対立については、三浦淳『若きマン兄弟の確執』知泉書館 2006 年に詳しい。

[13] Detering, Heinrich: Das Ewig-Weibliche. Thomas Mann über Toni Schwabe, Gabriele Reuter, Ricarda Huch. In: *Thomas Mann Jahrbuch 12*(1999), S.149-169.

のフレーズで賛美されるのは「優しさ」などの典型的な女性性というよりはむしろ、シュヴァーベの同性愛的な女主人公が抱く、愛の対象に到達しないが故の純粋な愛への「憧れ」であると解釈するほうが自然である。主人公エスターは、レズビアン的な愛情関係にあるエリザの兄で、やはりエスターを愛する若者アーネとの会話において次のように漏らすが、それをマンはその原文のまま引用している。

> 完全な愛というのは別の魂への憧れであって、自然の目的の道具となることではないように思うわ。[14]

ここには有目的的な異性愛と、目的から疎外され、純粋になった同性愛が対比されている。しかし、マンはまたこのような一文をも引用する。

> 思うに、至高の合一へ到達することができも望みもしない愛によって、人は滅びなければならないのかもしれない。[15]

ここでは、このような愛が「至高の合一」へと到達しないことが前提とされる。マンの理想とする愛は、あくまでも憧れであって、決して現実となることがない。それは一方では永遠の切なさの感情であり、一方では寂莫たる不毛性となる。Detering は、マンがパウル・エーレンベルクとの関係を作品化しようとした「マーヤ」構想や『恋人たち』と題される予定だった小説、[16] さらには『トニオ・クレーゲル』(1903) とシュヴァーベの作品との類似性を指摘するが、この作品がマンにおける理想的な愛というものの概念の形成に何らかの影響を与えたことは、大いにありうることであろう。

しかし、ここで女性観という問題に立ち戻って考えるならば、ここに現れた「女性の愛」と「同性愛」の混乱を前提にもう一度、それを「永遠にして女性的なるもの」として称揚したマンのこの時点での精神構造を考えておく必要があるだろう。すなわち、こういうことが言えるのではないか。芸術家として、また同性愛的な傾向を持つ人間として、マンはアウトサイダーを自認していた。それは、孤高の人としての陶酔的な自尊心であると同時に自虐的な苦悩でもあった。一方、家父長制的な男性中心の制度が揺らぎつつも残る 20 世紀初頭においては、女性は周辺的な存在

---

[14] Das Ewig-Weibliche, S.57.

[15] Ebd..

[16] これらについては以下を参照：Wysling, Hans: Zu Thomas Manns „Maja"-Projekt. In: Scherrer, Paul / Wysling, Hans: *Quellenkritische Studien zum Werk Thomas Manns.* (Thomas-Mann-Studien I). Bern / München 1967, S.23-47.

であった。マンにとって女性は、少なくともその排除されるという要素において容易に自己同化できるものであった。そしてそれがトーニ・シュヴァーベのような同性愛的傾向を持つ、孤独な芸術家であったならば、なおさらのことであった。

ここで再びエンゲルハルト嬢を呼び出そう。思い起こしてみるならば、彼女が恋をしている振りをするのは、ほかならぬ「女性」のショーシャ夫人である。もちろん、それは「振り」であって、彼女の性的傾向を示すものとはいえない。しかし、このことは彼女の中に描かれたものの正体を暗示するのではないだろうか。なぜなら、エンゲルハルト嬢の「恋」は、まさに愛の対象に到達しないが故の純粋な愛への「憧れ」であって、このようなトーニ・シュヴァーベの、トニオ・クレーガーの「恋」に重ねられる。彼女は、純粋であると同時に不毛な、したがって同性愛的な憧れを抱くことによって、マン自身の同性愛のあり方が投影された女性だったのである。

4．同性愛理論の二つの流れ

以上、エンゲルハルト嬢において「女性性」と「同性愛」のイメージが重ねられていたこと、したがってマンの同性愛のイメージは、まず女性に重ねられることで表されていたことを確認した。今度はここで、マンの同性愛理解の時代背景を概観しておきたい。マン文学の研究においてはしばしばもっぱらブリューアーとの関係からのみ捉えられるマンの同性愛であるが、ブリューアーを含む当時の同性愛理論には、一連の流れがある。ゲイ・スタディーズのスペシャリストとして知られる Oosterhuis は、ドイツで出版されていた世界初のゲイ・ジャーナル『デア・アイゲネ』(1896~1931) に掲載された論考を選択的に英訳したアンソロジーの前文および各章の序文、エピローグにおいて、同性愛をめぐる言説を明瞭かつ詳細に総括している。[17] 少し長くなるが、その概要を紹介しておこう。

当時の同性愛解放運動といえば、同性愛者を男性と女性の中間と看做す「第三の性」理論を唱え、『性的中間段階年報』を発行する「科学的人道委員会」の推進者、性科学者マグヌス・ヒルシュフェルトが知られている。ヒルシュフェルトら「科学的人道委員会」は、その名のとおり、同性愛が生物学的な現象であること、男性同性愛者の心理学的構成は「ノーマルな男性」のそれとは異なっていることを科学的・医学的に証明し、その前提の上で悪名高い刑法 175 条の廃止を求めていくものであった。そこには 1844 年に初めて「性的精神病質」という言葉を使ったヘルマン・カーン、ドイツで初めて同性愛者の嗜好が生得的なものでもあると主張したヨハン・ル一

---

[17] Oosterhuis, Harry: *Homosexuality and Male Bonding in Pre-Nazi Germany. The youth movement, the gay movement, and male bonding before Hitler's rise. Original transcripts from Der Eigene, the first gay journal in the world.* New York 1991.〔邦訳：ハリー・オースターホイス「ナチス以前のドイツにおける同性愛と男性結社」(辰巳伸知／月川和雄 訳)：『イマーゴ』1995 年 11 月号、120~175 頁。〕

トヴィヒ・カスパー、男性同性愛者の肉体には女性の魂が宿っていると論じたカール・ハインリヒ・ウルリヒス、同性愛のいわゆる医療化を定着させたとされるリヒャルト・フォン・クラフト－エービングなどの名が挙げられる。同性愛を論じるときの用語は繊細な問題を含むため慎重を要するが、いずれにせよこの一派の主張する同性愛とは、正常よりは異常に、健康よりは病理的なものに、そして男性的というよりは女性的なものとして理解されるものであった。

しかし、当時のゲイ・ムーブメントにはもう一つの、より目立たず、現在にはほとんど伝わっていない運動があった。このドイツ第二の同性愛者組織「主体者連盟（Gemeinschaft der Eigenen）」の指導者、エリート的かつアナーキスト的な意見を持つ活動家アドルフ・ブラントによって『デア・アイゲネ』は発行される。その意図によれば、雑誌タイトルの「デア・アイゲネ（Der Eigene）」は、「教会や世俗の権威に対する従属だけでなく、道徳や合理主義やイデオロギーに対するいかなる個人の従属をも強く拒否」する「自己所有者」、「主体者」という含みを持つという。ファシズム研究者のHewittが後にマスキュリニスト（masculinist）と名づけた彼らのうちには、[18] ヒルシュフェルトにもっとも激しく異論を唱えた一人とされる動物学者で哲学者のベネディクト・フリートレンダー、及びフリートレンダーに紹介され、『性愛的現象としてのドイツのワンダーフォーゲル運動』（1912）を書いてセンセーションを起こしたブリューアーも含まれる。

ブラントの主体者連盟の運動は、ヒルシュフェルトらをも含めた同性愛に対する医学的・生物学的アプローチへの嫌悪を特徴とする。すなわち、彼らは「男性一般の間に存在するホモエロティシズムの文化的重要性」を強調したのである。大雑把に言って両者の対立は次のような論点に集約されるだろう。すなわち、ブラントらによれば、同性愛は病的な逸脱ではなく、むしろより優れた「現代社会の選ばれた批評家」であるということ、同性愛は男性と女性の中間や女性化した男性などではなくむしろ「真の男らしさ」であると言うこと、そもそも同性愛は医学の問題ではなく倫理と文化の、より高尚な問題であるということ、である。

彼らの主張する「文化的重要性」を、Oosterhuisは、18世紀に遡るドイツの「友愛」の伝統の密接なかかわりの中に見る。「友愛の世紀」とも呼ばれたこの時代、シュトルム・ウント・ドラングとロマン派の反合理主義的な運動の中で、「友愛」は極めて高く評価される。それは「第一級の宗教的感情」であり、「個人が自らを高めていくことが可能となる領域と見なされていた」。それは「主として男性から構成される知的エリートのためのもの」であり、「プラトンに依拠する形で（・・・）男女間の興奮した、予測のつかない恋愛関係よりも優れていると見なされていた」のである。

---

[18] Hewitt, Andrew: Die Philosophie des Maskulinismus. In: *Zeitschrift für Germanistik* 9 (1999), S.37.

しかしその一方で「男性間の友愛は、情熱的で官能的な性質を持ち得る恋愛の一形態であるとも考えられていた」。ジャン・パウルやクライスト、シラー、ワーグナーらの手紙及び論文は、それらは現代の感覚で判断するならば男女の恋愛としてもあまりにもあからさまな愛情表現と見ることが出来るだろう。「友愛」は19世紀のかなり遅くまで肉体的同性愛関係の疑惑を受けることなく官能的であることが出来たのであり、当時このようなエロティックな色合いを持った友愛に関して、ある種のおおらかさが存在したと考えられるのである。

この「友愛」は、19 世紀の半ば以降、繁栄の場を失う。その背景には、いわゆる近代家族の普及にともない、人間同士の情緒的なつながりが公的な領域から排除され、「家族」の領域における異性愛的な秩序に限定されていったこと、そして「同性愛」への科学的知識の発展があった。「おおらかさ」は科学的な厳格さへと姿を変え、正常なものと異常なもの、性的なものと非性的なもの、同性愛的なものと異性愛的なものが峻別されるようになる。そしてこの「友愛」の萎縮は、世紀転換期から20世紀前半にかけて、「友愛」の伝統の流れを汲むブラントらの反発を引き起こしたのである。

ただし、この運動には大きな否定的側面が内包されていた。すなわち彼らの著作の中には、ヒルシュフェルトらの自由主義的な位置とは異なり、しばしば男性結社についての彼らの理念を実現する方法として、極端なナショナリズムを選択したものがあったのだ。それゆえ男性間の友愛共同体意識、カリスマ的な指導力、戦闘的精神、自己犠牲などと結びつくことによって彼らの理念はナチズムへと取り込まれていく。実際、ナチス親衛隊のメンバーには、ワンダーフォーゲル出身者が数多くいたことは広く知られていることであるが、ナチスは、いわば男性同盟というドイツ・ナショナリズムの理念を現実のものにしたものであった。 ― 彼らの擁護した同性愛者が皮肉にも第三帝国において過酷な迫害を受けたのは、周知のとおりである。その理由は、第三帝国においては、性愛が繁殖や人口の増大、いわゆる「アーリア」人種の純潔性に奉仕するものであり、同性愛はそれを妨害するものであったからでもある。しかし Oosterhuis はむしろ男性同盟の理論の中に同性愛者迫害の決定的理由を見る。すなわち、男性同盟、男性結社の理論によって作られた国家社会主義の組織から同性愛者を迫害することによって、その組織の純粋性を保障することが必要だったのである。「同性からなる組織の団結のために必要とされる男性観の同士愛が同性愛に堕落するのではないかという恐怖が、第三帝国における同性愛者迫害を強く支えた」のである。[19]

マスキュリニストたちの運動のもうひとつの問題的な点は、上記ナショナリズムへの傾向とも

---

[19] オースターホイス、174 頁。なお、この点に関連するものとして以下のような研究書があげられる。ジョージ・L・モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ　市民道徳とナチズム』(佐藤卓巳／佐藤八寿子訳) 柏書房 1996 年；星乃治彦『男たちの帝国』岩波書店 2006 年。

関連するが、その反フェミニズム精神にある。この点でも同様に、ヒルシュフェルトら性科学者たちとマスキュリニストたちは、逆の方向を向く。ヒルシュフェルトは、男女の同権が同性愛者の解放のためにもなることを強調し、女性解放運動に協力をしている一方で、『デア・アイゲネ』の寄稿者の多くにとって、女性解放はしばしば、否定的な意味における「民主主義」と結びつけられた上で排撃される。

> 『デア・アイゲネ』の寄稿家の多くにとって、女性解放は民主化のもっとも忌まわしい結果だった。（・・・）フリートレンダーも、女性が男性に劣っているにもかかわらず、現代社会に影響をもちすぎていると言った。彼らの見解では、母親、主婦、妻が男から多くを要求しすぎている。それゆえ、男同士の親密な友情が挫かれ、偽善的な上品ぶりなくしては信用を保てなくなってしまった。フリートレンダーはキリスト教の禁欲主義以外にも、結婚に対するロマン主義的な理想を批判した。その理想によると夫婦は対等で、たがいに相手を熱愛するとされる。（・・・）彼らは結婚そのものには反対ではなかったが ― ブラント（・・・）を含む「連盟」の他の会員同様、彼らも結婚していた ― 、家庭生活に専心没頭しすぎるべきではないとした。[20]

> フリートレンダーに明らかだったのは、ドイツ国民が男性結社を国家の中核とすることによって、道徳心、自己犠牲、中世と言った男性の友愛の気高い目的を保障し、西洋文明のさらなる女性化を食い止めなければならないということだった。[21]

この組み合わせは、フェミニズムが民主主義・社会主義などの反体制的な動きと歩みをともにしてきた歴史を反映する。19 世紀後半に盛んになった女性解放の動きは家父長制に脅威を与え、男性のアイデンティティーに多大な不安を与える一方で、「男性性」というものの更なる硬直化を促した。女性嫌悪のイデオロギーに論拠を提供したものとしてあまりに有名なオットー・ヴァイニンガーの『性と性格』（1903）はその一つの現れといえるだろう。さらに、基本的にその女性観を踏襲した[22] と考えうるハンス・ブリューアーのみならず、カール・シュミット、アルフレート・ボイムラーへと受け入れられていき、女性嫌悪は一つの現象を形成した。[23]

---

[20] オースターホイス、156 頁。

[21] 同上、157 頁。

[22] Geuter, Ulfried: *Homosexualität in der deutschen Jugendbewegung. Jungenfreundschaft und Sexualität im Diskurs von Jugendbewegung, Psychoanalyse und Jugendpsychologie am Beginn des 20. Jahrhunderts.* Frankfurt am Main 1994, S.167.

[23] このような女性嫌悪現象の研究書として参照した研究書は以下のとおり。クラウス・テーヴェライト『男た

家父長制には女性の抑圧と同性愛の排除という二つの側面があったという単純な図式化が赦されるならば、彼らマスキュリニストたちの運動は、同性愛の排除という面においては家父長制に異論を唱えながらも、女性の抑圧という点では家父長制と手を組んでいたと言えるだろう。彼らにとって刑法175条の撤廃は目標ではなく、単なる過程に過ぎなかった。彼らが求めていたのは、社会の均一化ではなかった。彼らにとって重要だったのは、男らしさの理想の実現であり、男性文化の復興であり、男性の同盟を基盤にした国家の樹立であった。この排他性が、彼らの運動を社会主義的活動ともフェミニズム的活動とも協力を不可能にした。そして本質的方向性を同じくしたナチズムによっても、その同性愛者迫害によって基盤を得ることがなかったとき、彼らは寄る辺なき存在となりジレンマに陥ることになったのである。

Oosterhuis は、このようなナショナリスティックで反フェミニズム的な傾向には批判を加えつつも、全体においてこの運動をミシェル・フーコー的な観点から好意的に評価しているといえる。彼は、ナチスによってユダヤ人や社会主義者らとともに迫害された同性愛者解放のためのこの運動を、「同性愛の医学的なおせっかいと結びついていたラベリングと統制に対する抵抗」と看做す。同性愛が社会的・歴史的な構成物であるという考えは、これら『デア・アイゲネ』の寄稿者たちによって始められていたのである。

5．マンのブリューアー受容

マンが影響をうけたのは、このような流れを受けたブリューアーの思想だった。ともに「保守革命」の思想家と位置づけられる[24] ブリューアーとマンとの関係については既に多くの研究が行われているため、[25] ここでは簡単にその概要を確認しておくに留めよう。

ちの妄想　女・流れ・身体・歴史』（田村和彦 訳）法政大学出版局 1999年；ニコラウス・ゾンバルト『男性同盟と母権制神話　カール・シュミットとドイツの宿命』（田村和彦 訳）法政大学出版局 1994年；ジョージ・L・モッセ『男のイメージ　男性性の創造と近代社会』（細谷実／小玉亮子／海妻径子 訳）作品社 2005年。

[24] Mohler, Armin: *Die konservative Revolution in Deutschland 1918-1932. Ein Handbuch.* Darmstadt 1972.

[25] 本論において主に参照したのは次のとおり。Wißkirchen, Hans: Republikanischer Eros. Zu Walt Whitmans und Hans Blühers Rolle in der politischen Publizistik Thomas Manns. In: Härle, Gerhard: *Heimsuchung und süßes Gift. Erotik und Poetik bei Thomas Mann.* Frankfurt am Main 1992, S.17-40; Oosterhuis, Harry: The Dubious Magic of Male Beauty. Politics and Homoeroticism in the Lives and Works of Thomas and Klaus Mann (Translated from the Dutch by Ton Brouwers). In: Lorey, Christoph / Plews, John L. (ed.): *Queering the Canon. Defying Sights in German Literature and Culture.* Columbia 1998, p.181-206; 田村；奥田；福元。ゲイ研究の専門家である Oosterhuis の研究はトーマス・マン研究として必ずしも精緻なものとはいえないものの、田村が後に指摘した『魔の山』における男性同盟的なモチーフに触れるなど、示唆に富む研究と言えるだろう。一方福元の研究は基本的に Wißkirchen を踏襲しながらも、特にブリューアーの著作等に関してはそれをはるかに凌ぐ詳細な分析を加

まず、ブリューアーの理論とはどのようなものであったか。ブリューアーの理論は、マスキュリニストの例に漏れず、同性愛を男性と女性の中間や女性化した男性などではなくむしろ「真の男らしさ」であるとし、女性を排除した男性同士のつながりを称揚するものであった。[26] マンはブリューアーの思想に少なからぬ共感を抱き、ほとんど魅了される。[27] それは、ブリューアーによって、これまで同性愛に引け目を感じていたマンがまさにその不毛さをポジティヴに解釈する契機を得たからに他ならない。同性愛は、もはや『ヴェニスに死す』(1912) におけるように「一面的に頽廃的なものやデカダンスに」関連づけられるのではなく、例えば『魔の山』から読み取れるような「肯定的なカテゴリー」へと転換するのである。[28]

ブリューアーの理論の特徴は大きくいって二つある。一つは、ホモセクシュアリティという用語の代わりに「転位 (Inversion)」というフロイト学説から援用した「方向との逆転」と言う意味の言葉を採用していることにある。しかしブリューアーはその一方で、「同性愛」を「正常な」異性愛が機能しないことにより対象リビドーがナルシシズム的段階に退行して自分と等しい同性の対象を求める現象であるとするフロイトの理論の、その病的なニュアンスを拒絶する。「転位的に」同性愛にリビドーを向ける「男性英雄」は、「全人格的人間」とされ、青年の真の指導者として男性同盟の中心に君臨する。

ブリューアーの理論のもう一つの特徴は、ブリューアーがフリートレンダーらの流れを汲み、同性愛の理論を政治論に結びつけたことである。[29] マンのブリューアー受容の特色もひとつには

えた研究といえる。

[26] なお、福元が採用しているセジヴィックの「ホモソーシャリティ」の理論 (イヴ・コゾフスキー・セジウィック『男同士の絆　イギリス文学とホモソーシャルな欲望』(上原早苗／亀澤美由紀 訳) 名古屋大学出版会 2001 年) は、ホモフォビアを前提としつつ異性愛的にふるまう男同士の関係に着目する点に特徴があるが、同性愛を擁護する立場のブリューアーを対象とした福元の考察にはその点が必ずしも十分に反映されていないように思われる。おそらく福元が明らかにしようとしたのであろう家父長制、男性同盟、ナチズムの連続性は、4 節で紹介した Oosterhuis の理論によってより適切に説明できるだろう。

[27] マンにおけるブリューアーの一番初めの直接的影響は『非政治的人間の考察』の中に現れる。「イロニーとラディカリズム」の章において 1917 年のブリューアーの著作『男性共同体における性愛の役割』第一巻から、この文脈においては既に有名なあの「エロスとは、ある人間を、その価値を度外視して肯定することである」(XII 568) というフレーズを引用する。その後 1919 年 2 月にはブリューアーが自身の講演会にマンを招待したことから、直接の邂逅が実現する。この「ドイツ帝国、ユダヤ性、社会主義」と題された講演について、マンは手放しの絶賛をしたとされる (福元、220 頁以下)。さらにそれに続いて同年 9 月には『性愛の役割』第二巻をその発行直後に読んだマンによって『『考察』もまた私の性的倒錯の表現」に他ならないというやはり周知のあのフレーズが日記に記される。

[28] Wißkirchen, S.23.

[29] フリートレンダーからブリューアーへの流れについては以下に詳しい。Bruns, Claudia: (Homo-)Sexualität als virile Sozialität. Sexualwissenschaftliche, antifeministische und antisemitische Strategien hegemonialer Männlichkeit im Diskurs der Maskulinisten 1880-1920. In: Heidel, Ulf / Micheler, Stefan / Tuider, Elisabeth (Hrsg.): *Jenseits der Geschlechtergrenzen. Sexualitäten, Identitäten und Köper in*

これに関係する。『非政治的人間の考察』から一転、ヴァイマル共和国への支持を表明した『ドイツ共和国について』(1922) において、「思想は変えたが志操は変えていない」とするマンは、ノヴァーリスの名前を挙げて、あくまでも保守的、ドイツ的共和国を提唱する。さらに、その共和国はウォルト・ホイットマンの名の下、ホモエロティックな男性共同体という形態をとる。

> それは、一般に妥当すると信じられている性の両極性という法則が排除され、無効なものであることが明らかになる、性愛のあの領域のことです。そこでは性質を同じくするものが結びつき、成熟した男性が青年と結びついて尊敬を受け、その中に己自身の夢を神化しようとしたり、あるいは若い男性が自分の似姿と結びつくという形で、情熱的な共同体となる様が見られます。社会は、自らがこのような本質を秘めているとは知らずに、これを意識から排除したり、あるいはお上品ぶってこれを忌避したりしてきましたが、いまやこの現象に向けられていた悪評や否定の呪縛を解き始め、(・・・) その多様性を人間的に吟味し始めています。この現象は倦怠、退廃、病気を意味するかもしれません。(・・・) しかし極めて神聖なもの、文化的に実り豊なものを内包しうる感情の複合体を、基本的に没落の領域に属するものとすることは不可能なのです。(XI 847)

この講演において描かれる共和国の枠組みは、ノヴァーリスやホイットマンの名前によってかたられている。しかし、その根底にある構造を決定付けているのはブリューアーに他ならない。[30] ブリューアーとの出会いは、マンに男性間のエロスによって結び付けられる、共和国のありかたのイメージを提供したのである。

しかし、マンのブリューアー受容は、このような政治的・具体的な理論レベルに留まらず、美学的・抽象的、理念的なレベルにおいてより決定的であったと理解されている。これまでの研究においてはこのような政治的ブリューアーの影響以上に強調され、本論においてもより重要なポイントとなるのは、肯定的に解釈された同性愛がイロニーとして創造の原理となる、という点である。

Perspektiven von Queer Studies. Hamburg 2001.

[30] Widdig, Bernd: *Männerbünde und Massen. Zur Krise männlicher Identität in der Literatur der Moderne*. Opladen 1992, S.55-72. なお、Kurzke もこの見解に立っている。Kurzke, Hermann: *Thomas Mann. Epoche-Werk-Wirkung*. München 1997, S.178. また Wißkirchen も、『共和国について』の時点でのマンはすでにのちにナチスにつながっていく軍隊的な男性同盟的なものの危険性を認識するようになっており、ブリューアーの理論そのものに対しては距離をとるようになってきているとしながらも、トーマス・マンにおける政治的・エロスの概念の中心にはブリューアーが存在し続けたことを認めている。Wißkirchen, S.37f.

本来「冷たい認識」や「懐疑」の精神である「イロニー」が「中間のパトス」であり、動的な「創造の原理」「創造の非決定状態」[31] になりうる、という『ゲーテとトルストイ』において定式化されたマン独自の公式は、既に馴染み深いものといえるだろう。そこに「イロニーとはエローティクである」という『非政治的人間の考察』のやはり有名なフレーズを突き合わせ、その「エローティク」を同性愛と読み直すことで、本来「不毛性」の象徴ともなる「同性愛」は「創造の原理」と「イロニー」という一般的には相反しうる二つの要素の架け橋となる。そしてこのような同性愛の読み替えを可能にしたのが、マンが『非政治的人間の考察』に引用した「エロスとは、ある人間を、その価値を度外視して肯定することである」(XII 568) というブリューアーのエロスの定義であった。それは必ず距離を伴ったホモエロティックなものであり、「精神の性に対するイロニーとしてのエロス」だったのである。[32]

6. 同性愛と他者の不在

しかし、マンのこのようなブリューアー受容について、私は若干の留保を加えずにいられない。それは、ほかならぬ本論のテーマ、女性像の問題から浮かびあがってくる疑念である。以下、二つの観点からこの問題を論じたい。

まず一つ目は、マンがブリューアーによって手に入れた不毛性の反転としての「創作の原理」が、女性の排除と表裏一体のものであったことの問題性である。

ここでもう一度トーマス・マンに影響を与えたブリューアーを含むマスキュリニストたちの理論を思い起こしてみたい。すなわち、上述のように、この本来差別からの解放を謳う運動は、反フェミニズムの動きにおいて家父長制と歩調を合わせていたのである。そして、マスキュリニストの同性愛観に共感したマン自身の女性観も、決してこのような流れから逸脱するものではなかった。

第2節においては、初期のころの女性への自己同化から第一次世界大戦期の女性嫌悪へというマンの女性観の変化を確認した。しかし、これをもってマンの女性観が180度変わったと捉えるならば、それは必ずしも妥当な見方ではない。というのも、『永遠にして女性的なるもの』の中に既に、「男性としてのマン」から見た女性蔑視の視線が少なからず見て取れるからだ。そもそもマンの自虐的な自己同化が、マン自身女性をそのように見る「男の視点」を持っていたことを証明するものであるが、それ以上にここで女性性を絶賛するマンの姿勢には、何か、マンのトーニ・シュヴァーベに対する、そして男性の女性に対する優位を前提とした上での余裕、従ってそ

---

[31] 福元、134頁。
[32] 同上、228頁。

こにかすかに読み取ることのできる蔑視のようなものがある。それは例えば、エッセイが「この作品を知っている人、立ってください」という呼びかけから始まることに象徴的だ。それは、当時無名で今日までほとんど脚光を浴びたことのないこの女性作家に対する先輩的な態度を前面に出したものといえるからである。そして、その「女性性」とは、「優しく」「やわらかく」[33] という極めて受身的な形容詞で語られる。マンの意識は、突出してと言うわけではないにせよ、少なくとも当時当然とされていた程度に、家父長的な社会精神の中に位置づけられるものであったに違いないのである。したがって、この一見相反するように見える女性への自己同化と嫌悪は、実は、漠然と存在した女性蔑視の姿勢の表出の程度の — ただし極端な — 差でしかない。

そのことは、第一次世界大戦中のマンの激しい女性嫌悪の言説が、しばしば民主主義的、フランス的という用語と同列に理解されていることからも裏付けられる。

> 仮に、世界がドイツの「プロテスト」から解放され、文明の帝国が完成され、無敵を誇示することになったとしよう。その結果は、いささか滑稽で、いささか平板に人間的で、陳腐な堕落を見せる、女々しく優雅なヨーロッパ、大言壮語のデモクラシー的なヨーロッパ、タンゴとツーステップ風俗のヨーロッパ、パリの高級娼婦のように文学的なモンテ・カルロ・ヨーロッパになってしまうだろう。(X 66)

これは、4節で見たような、マスキュリニストたちの女性嫌悪的な政治思想とまったく同じ傾向の発言といえるだろう。彼らの女性嫌悪は、日常的な無意識のレベルにおいては男性の優位を当然のものとする絶対的な価値観と、それが脅かされそうになるときに攻撃へと転じざるを得ないもろさとを併せ持つ。そこにあるのは個別具体的な「女性」ではなく、総体として「民主主義」と手を組み男性社会を脅かす幻想であり妄想である。そしてその女性は、「恐怖」として圧倒的な存在感を誇示する一方で、あくまでも「妄想」であり、個別の女性としてはむしろまったく空虚な存在となる。

マスキュリニストたち及びマンは、女性嫌悪という点において家父長制下の男性社会に属していた。そこでは女性は周辺化され、男性の妄想の中に、イメージの中に閉じ込められる。女性は他者として不在となり、他者を排除した空間の中で、男性が誇大妄想的な創造性を発揮するのを可能にする。このような創造性は、制約のない自由の中で豊かな造形を可能とする一方で、現実を捉えることがないまま妄想の世界へと閉じられていく。[34] トーマス・マンにおける「創造の原理」、すなわち動的なイロニーは、そしてエロスは、このような女性を排除した男性原理におけ

---

[33] Das Ewig-Weibliche, S.54f.
[34] Bruns, S.102.

る創造性と、その根を同じくしていたのではなかっただろうか。

このことは、『魔の山』のヒロイン、ショーシャ夫人の極めて重要な性質を説明する。前拙論では、『魔の山』におけるショーシャ夫人の抱える複雑さ、混乱および言葉の氾濫、そしてコンセプトの不安定さを確認した。[35] これは、今ここで見てきたのと同じ、女性を排除した不毛で誇大妄想的な「創造の原理」に基づくものと理解できる。ショーシャ夫人とは何か。彼女は、「他者」であり「不在」であった。「他者」についてマンが知っていることは、彼女との合一への「束の間の恍惚たる幻想」、それを抱く自己のみである。だからこそ、ショーシャ夫人への高まり続ける情熱以上のものを書こうとしたとき、すなわち彼女の素性、経歴、彼女の言葉、彼女の思想、さらには「合一以後」の彼女を書こうとしたとき、マンの筆はあのような混乱に陥った。それは、まさに彼女の「不在」によるものだったのである。

7．男性の女性化としての同性愛

従来のマンのブリューアー受容への留保の二点目は、その影響の範囲の問題である。これまでの研究においては、ブリューアーの同性愛こそマンの同性愛を規定するものであるかのごとく解釈され、そこにヒルシュフェルトら同性愛を「男性の女性化」と看做す流れのマンへの影響は問題にされてこなかった。しかし、それは妥当な見方だろうか。

Detering によれば、先に紹介した『永遠にして女性的なるもの』で論じられる無名の女性作家トーニ・シュヴァーベは、しかしながらある種の人々の間ではそれなりの知名度のある作家であった。すなわち、3 節で紹介した『デア・アイゲネ』誌や、ヒルシュフェルトの科学的人道委員会においては、彼女は決して無名などではない存在だったのである。

残念ながら、マンがこれら同性愛者解放運動の雑誌を知っていたという証拠はない。しかし、Detering は『永遠にして女性的なるもの』におけるマンの関心が、ヒルシュフェルトのそれと近いものであったことを示唆する。すなわち、このエッセイにおいて使われたインドの最下層民を示す「チャンダーラ」という言葉が、このエッセイの公刊されたその同じ年に出版された詩集で、その翌年ヒルシュフェルトの委員会の発行する雑誌『性的中間段階年鑑』に紹介された同性愛文学の詩集『愛のチャンダーラに捧げる孤独者の詩』に由来すると推測するのである。[36]

『永遠にして女性的なるもの』におけるマンの同性愛理解は、明らかにヒルシュフェルトのそれと重なる。マンの念頭にある同性愛は、ブリューアーのそれと違って、女性トーニ・シュヴァーベに、そしてその作中の女性同性愛者エスターに共感する、男性の女性化として理解されうる

---

[35] 伊藤（2005）参照。
[36] Detering, S.158f.

ものであったのだ。そしてそのような女性への同性愛的自己の投影は、トーニ・シュヴァーベに始まり、エンゲルハルト嬢、そしてマンの最後の作品『欺かれた女』(1953) の中に脈々と受け継がれる。このような形の同性愛は、ブリューアーの影響によっても、決して途切れることのない、マンにとって本質的なものだったのではないだろうか。そして、むしろ自らをヒルシュフェルト的に、女性的に、アウトサイダー的に理解するマンの本質こそが、逆に自分には手の届かないものとしてブリューアー的な「真の男らしさ」を求めたのではなかっただろうか。

「不在の他者」ショーシャ夫人に対し、エンゲルハルト嬢にはマン自身、すなわち「主体」が投影される。それはブリューアーの言うポジティヴな同性愛理解とは異なり、相も変わらず他者を必要としない不毛な同性愛者としての主体である。彼女は恋愛の世界に密かに胸を焦がす一方で、その情熱の虚無さ、無意味さをも表現する。エンゲルハルト嬢の演じる「恋に対する恋」とは何か。それは対象の存在しない愛であり、情熱への憧れであった。言い方を変えるならば、トーマス・マンの同性愛とは、そのような性質のものであった。そしてこのような対象不在の愛は、ブリューアーの影響の外にあって、常にマンの中に存在し文学化され続けた。マンの同性愛は、ショーシャ夫人と複雑な駆け引きを必要とするハンス・カストルプの中によりも、むしろ実に目立たない一人の端役、エンゲルハルト嬢の中にこそ描かれていたのである。

*

このような理解に立ったとき初めて、「ワルプルギスの夜」の節に挿入されたシーンの意味が明らかになる。論の終わりにこの極めて象徴的な場面を紹介しよう。

「ワルプルギスの夜」の節、「愛の合一」へと向かう長いフランス語交じりの会話を続けるショーシャ夫人とハンス・カストルプの会話の途中、ショーシャ夫人はサナトリウムを発つことをカストルプに告げる。そのとき、メンデルスゾーンの『真夏の夜の夢』ばかりを演奏するマンハイムの男とその横に座ったエンゲルハルト嬢の描写が、思い出したかのように挿入される。

> しばらく止んでいたピアノの音が、スラブの青年に代わって楽譜を広げたマンハイムの男の手によって再び鳴り始めた。彼の横にエンゲルハルト嬢が座って、楽譜をめくってやっていた。大部分の療養客は水平状態に帰ったらしかった。(III 470)

しかし恋人たちの会話が進みいよいよ熱っぽくなっていくと、エンゲルハルト嬢はもはやその場にいたたまれなくなる。

> マンハイム生まれの病人が、斜め向こうの隅にあるピアノを片手で弾いて、低い、途切れ途切れの音を立てていた。彼のそばに腰を掛けた女教師はひざの楽譜をめくっていた。

ハンス・カストルプとクラウディアの会話が途切れると、マンハイムのピアニストも鍵盤に軽く触れていた手をひざへ下ろして弾くことを止め、エンゲルハルト嬢は相変わらず楽譜を覗いていた。謝肉祭の夜会で最後に残ったこの四人は、身動きもせず座っていた。数分の間、静寂が続いた。その沈黙の重さに耐えかねたように、ピアノのそばの二人の頭が、マンハイムの男の頭は鍵盤上に、エンゲルハルト嬢の頭は楽譜の上へ、次第に深く垂れていった。そしてこの二人は、密かな了解が出来たかのように同時にそっと立ち上がり、まだ人が残っている部屋の隅をわざと振り向かないようにと、首を縮め、腕をぎこちなく身体にくっつけ、爪先立ちで書き物部屋と談話室を通り抜けて、姿を消していった。(Ⅲ 474)

この場面において、彼女はハンス・カストルプ（およびショーシャ夫人）とのコントラストの中に捉えられる。一方は恋愛を「実際」に体験しようとする者、もう片方は覗き見的に恋の真似事を楽しみながらも、自分自身のこととしてはそれにただ憧れることだけしか許されていない恋の傍観者である。物語は、カストルプの恋路を追い、エンゲルハルト嬢から離れる。しかし、人間マンの率直な姿は、むしろエンゲルハルト嬢とともに部屋からそっと立ち去ったのではなかっただろうか。

トーマス・マンにとって女性とは何か。ここに取り上げたのはトーマス・マンの作品におけるごく一部の女性たちである。しかし、そこにはトーマス・マンの同性愛と呼ばれているものの形を浮き彫りにする、はっきりとした二つの類型が見られた。ショーシャ夫人は同性愛的な欲望が向けられる「不在の他者」として、マンの世界から疎外され、一貫した輪郭を持ち得なかった。その一方で、物語の中ではごく小さな役割を負うに過ぎない女性エンゲルハルト嬢は、その欲望の「主体」の投影として、その細部におけるまでくっきりと「存在」していた。トーマス・マンの女性観は、その二つの極のあいだを揺れ動いていたのである。

Fräulein Engelhart
— Frauenbild und „Homosexualität“ im *Zauberberg* —

ITO Mashiro

Nach der Veröffentlichung der Tagebücher im Jahre 1975 wurde Thomas Manns Tendenz zur Homosexualität intensiv und kontrovers diskutiert. Dagegen war nur wenig die Rede davon, was Frauen für ihn bedeuteten und welches Frauenbild er hatte: Immerhin hatte er ja Katja Pringsheim geheiratet, Kinder mit ihr gezeugt und in seinem Werk zahlreiche Frauengestalten geschaffen. Mein Beitrag beschäftigt sich damit, die Bedeutung des Frauenbildes bei Thomas Mann durch die Analyse einer unauffälligen weiblichen Nebenfigur, Fräulein Engelhart, zu verdeutlichen.

Fräulein Engelhart, eine unansehliche Lehrerin, die beim Essen neben dem Protagonisten Hans Castorp sitzt, führt mit ihm komplizierte Gespräche, die sich um Madame Chauchat drehen, so, als ob nicht er, sondern sie in diese „katzenartige“ Russin verliebt wäre. Meiner Meinung nach drückt sich die homosexuelle Tendenz des Autors nicht in Hans Castorp aus, der die Protagonistin liebt, sondern in dieser sich nach Liebe sehnenden Lehrerin, weil ihre Liebe dasselbe Schema wie Tonio Kröger hat und mit großer Sympathie dargestellt wird. Hier wird Fräulein Engelhart zum Subjekt des Autors.

Das läßt sich verstehen, wenn man die Sexualität Thomas Manns nicht nur in Zusammenhang mit Hans Blüher, dem die Homosexualität „virile Sozialität“ bedeutete, sieht, sondern auch mit Magnus Hirschfeld, der sie für „Effiminierung“ hielt. Meiner Meinung nach bedeutet die Homosexualität für Thomas Mann zeit seines Lebens „Effiminierung“, obwohl Blühers Einfluss sehr groß war. Die Art und Weise, wie Thomas Mann sich selbst in Fräulein Engelhart projiziert hat, beweist diese Ansicht.